

# 石川県立美術館だより

平成15年7月1日発行 第237号



虎図  
岸駒(2ページ「常設展示室(第6展示室)」参照)

夏休み 親子で楽しむ美術館

## 美術の動物園

7月17日(木)~8月17日(日)

### 目次

美術の動物園 .....	2	講演会記録(北野恒富とその時代) .....	5
茶道具と名物裂 .....	3	図書閲覧室NOW .....	6
茶道美術名品展 .....	3	月例映画会今月のイチ押し、企画展示室 ...	6
常設展示室 主な展示作品 .....	4	企画展TOPIC、七月の行事案内他 .....	7
美術館小史・余話(35) .....	4	所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信 ...	8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

常設展示室 第6展示室)

特集  
夏休み 親子で楽しむ美術館

# 美術の動物園

7月17日(木)~8月17日(日)



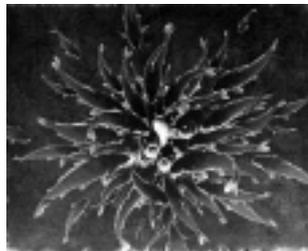
獅子図 木村雨山

獅子図  
あたりをにらみまわし、自らの猛々しさを誇示するライオン。まさに百獣の王の名にふさわしい姿です。その鋭い視線の先には何があるのでしょうか。



チーター 上田珪草

チーター  
夜の闇に群れているチーターです。夜行性の動物らしく、わずかな月の光に鋭く光る目はとても印象的です。



求餌図 大沼憲昭

与えられた餌に群がる鯉。飛び跳ねる鯉の水音が聞こえてきそうです。

テーマ一 生き生きとした動物の姿

夏休みの新しい企画として、「親子で楽しむ美術館」を開催します。わかりやすく、楽しみながら美術に親しむことができるように、身近な題材のなかから動物を取り上げました。日本画・油彩画・彫刻から約二十五点を展示します。  
《美術の動物園》というテーマで、虎やライオンなどの猛獣がいれば、猿や犬のような可愛らしい動物たちもいます。美術のなかにこんなに動物が登場していることに改めて驚きを感じます。  
今年の夏は美術館に出かけて、いろんな動物たちとともに、親子で楽しいひとときを過ごしてみたいかがですか。



涅槃図 宝勝寺蔵

涅槃図  
亡くなった釈迦を惜しんでいる動物たちの姿です。弟子はもちろんのこと、生きるものすべてを愛し、またすべてのものから慕われたという釈迦の死を悼んで、嘆き悲しんでいます。いろんな種類の動物たちが描かれています。

テーマ三 人とのつながり

周囲に向けては猛々しい顔つきをみせながら、乳飲み子に優しくふるまう母虎の、我が子に対する深い愛情がみられます。〔表紙参照〕



虎 緑蔭 吉田三郎

テーマ二 愛情あふれる動物たち

緑蔭  
二匹の猿をかたどった彫刻です。木陰にゆったりと憩う姿、愛情あふれる姿で、相手に自らの身を預けて安心しきつている様子がよく感じ取れます。  
群猿図  
たくさんの猿が群れ集つています。親子や兄弟が仲良く過ごしている猿山の様子です。



熱叢夢 宮本三郎

熱叢夢  
横たわる女性に戯れかかる白鳥が楽しげです。その白鳥は、ギリシャ神話に登場する神ゼウスが姿を変えたものです。



群猿図 伝円山応挙

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

# 茶道具と名物裂

7月17日(木)~8月17日(日)

前田家は、初代の利家以来、歴代藩主が茶の湯を通じて文化事業に深い関心を寄せていました。中でも三代藩主利常は傑出した文化大名として知られており、後水尾天皇や小堀遠州など、当時の優れた文化人たちとの交流も深く、また彼らの影響を大きく受けて、国内外から数多くの文物を収集しました。この利常のコレクションを根幹として、その後の藩主たちもまた茶道具を収集し、現在は国内外、時代を問わず、陶芸・漆芸・金工などの様々な優品が伝わっており、昨年の「利家とまつ」の展覧会で出品された、「茄子茶入 銘富士」や「井戸茶碗 銘福島」といった大名物と称された道具もあります。今回は、前田家の家紋である梅を散らした「玳皮蓋天目茶碗」と、その台である、名物「尼ヶ崎台」を展示します。

名物裂とは、主として中国の元・明・清時代に製作されて、日本へは鎌倉・室町から江戸時代にかけて輸入された裂地を指します。当時の茶人たちが、掛物の表装や茶道具の仕覆に使用して珍重したことから、このように総称されていますが、当初はこういった貴重な裂地は、禅僧の袈裟や唐絵の表装、唐物の仕覆などといった限られたものに使用されており、個々の名称は、このような所持した寺院や人物の名にちなんだものです。茶道の発展に伴って数多く輸入されるようになり、日本の染織技術は飛躍的に向上しました。特に前田家の所蔵した名物裂は伝世が古く、また種類も多いため、日本の染織史において重要なコレクションとされています。

今回の展覧では、前田家の膨大な茶道具コレクションのうち、中国、宋代の裂地から、日本の近代、人間国宝による銅鑼まで計四十二点、様々な時代、あらゆる種類の作品が一堂に会します。それぞれの道具から、前田家の茶の湯への関心の深さを感じ取っていただければ幸いです。

恒例の茶道美術名品展ですが、盛夏の季節に展示する機会はなかったように思われます。茶道は自然との一体感のなかに日々の生活が営まれた日本独自の文化といわれます。利休は夏の茶の湯の心得について、「夏はいかに涼しきように」と、目や耳で涼やかさを感じずともてなしの心を説いています。取り合わせの作品の中に季節感を感じていただくとともに、そこに利休が究めた精神世界を求めることができると思います。十月には開館20周年記念「畠山記念館名品展 茶道美術を中心に」を開催しますが、それに先立ち、所蔵品を中心とした茶道美術約五十点を展示し、茶の湯の世界に親しんでいただこうと思います。

## 玉舟宗璠墨跡

江戸十七世紀

一幅

「夏雲、奇峯多し」は、陶淵明の『四時詩』の夏の一部です。雲の変化に己の心を律する厳しい眼が感じられます。利休は茶室の掛物について、「掛物ほど第一の道具はなし、客亭主ともに茶の湯三味の一心得道の物也、墨跡を第一とす、その文句の心をうやまひ、筆者道人祖師の徳を賞翫する也」と述べています。また「小座敷の茶の湯は、第一仏法をもつて修行得道する事也」(『南方録』)と述べているように、墨跡は侘茶の真髄を示すものです。

## 祇園会図

伝長谷川久蔵

一幅

祇園祭は京の町に夏を告げる祭りです。千年以上の歴史をもつ八坂神社の祭礼で、古くは祇園御霊会といわれ、平安時代には毎年夏に流行した疫病や飢饉の沈静を祈願した厄払いのお祭りでした。七月十七日には豪奢を尽くした山鉦巡行が行われます。

この作品は母衣武者行列の場面で、もとは一巻の絵巻に描かれたものが、十二幅の掛物に分割され、「信長公拝領 利休居士遺具 咄齋(印)」の千宗旦の添書があります。祇園囃子とともに祭りに興ずる人々の熱気が伝わってくるようです。

常設展示室(第2展示室)

特集

# 茶道美術名品展

7月17日(木)~8月17日(日)



祇園会図 伝長谷川久蔵

常設展示室

# 主な展示作品

7月17日(木)~8月17日(日)

●=国宝 =重要文化財  
 ○=石川県指定文化財  
 ○=重要美術品 =金沢市指定文化財

## 前田育徳会展示室

特集 茶道具と名物裂

玳皮蓋天目茶碗(梅花天目茶碗)

名物 尼ヶ崎台

小石畳地宝珠形鳳凰雲文様金襴(興福寺金襴)

## 第1展示室

●色絵雄香炉

色絵雌雄香炉

野々村仁清  
野々村仁清

## 第2展示室

特集 茶道美術名品展

和蘭陀白雁香合 デルフト窯

黄天目

黄伊羅保茶碗 銘女郎花

竹時絵浪に亀図二重切花入

葫蘆様釜

古九谷

色絵老樹白雲図平鉢

色絵布袋図平鉢

青手樹木図平鉢

## 第3・4展示室(日本画・油彩画・彫塑・造形)

水辺

静映

岬

油彩画

カサブランカ

貿易風便覧

午後の港

彫塑・造形

縛

男立像

## 第5展示室(工芸)

釉裏金彩牡丹唐草文鉢

籃胎提盤

黄楊木透彫華実春秋文宝石管

## 第6展示室

特集

夏休み

親子で楽しむ美術館

美術の動物園

2ページをご覧ください。

観覧料

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		



黄楊木透彫華実春秋文宝石管  
初代池田作美



縛 坂坦道



午後の港 森本仁平



岬 由里本出

## 美術館小史・余話 35

嶋崎 丞 当館館長

二十周年を記念し、「国宝源氏物語展」を開催することで徳川美術館長の「了解を得たことについては先号で述べた通りである。そこで、次は残りの国宝源氏物語を所有しておられる五島美術館へ、出品交渉ということになった。徳川美術館の「了解を得ているだけに、交渉は正直言ってすぐ解決するだろう」と安易に考えていた。ところが、五島美術館からは「ものがものだけに五島邦氏(当時の東急社長)の許可がないとお返事できない」ということで、回答は一次お預けとなった。それからしばらくの間は、展覧会開催の計画が暗礁に乗り上げたかたちとなり、毎日毎日まさに神にも祈る気持ちで一杯であったが、ひと月程して出品してもよいというお返事をいただくことができた。

いよいよ二十周年の昭和五十四年度に入り、徳川、五島両美術館へ挨拶にお伺いすると、「作品をどのようにして運ぶか」ということが話題となった。今日ならば美術品輸送の専用車で運ぶということになるが、徳川美術館長からは、「万が一、車に事故が生じた場合、国宝源氏物語全作品が壊滅してしまうおそれがある。数人で手分けして、列車に持ち込んで輸送しよう」という提案がなされ、七名がグリーン車で運ぶことになった。それにも増して、五島美術館、東京駅、徳川美術館、名古屋駅、金沢駅、石川県美術館の間の輸送が大変で、警視庁と各県警へお願いしてパトカーの護衛付きでようやく無事に輸送することができた。



「国宝源氏物語絵巻展」図録

この展覧会は、全作品を二週間展示替えなしで公開するという、大胆不敵なもの展覧会で、こうした形で国宝源氏物語が公開されたことはまさに最初で最後のことであったように思う。徳川、五島両美術館に対し、あらためて感謝の意を表したいと思う。

## 旧館開館二十周年記念展開催について(2)

## 講演会記録

## 北野恒富とその時代

金沢に生まれた美人画の巨匠

講師 加藤類子氏

(池坊短期大学教授・前京都  
国立近代美術館主任研究官)

北野恒富という人は、関西でもその名前を知らないという人はあまりいないというぐらい、著名な美人画家です。しかし不思議なほど展覧会が開かれず、今度初めての大きな展覧会ではないかと思えます。恒富は、関西で活躍したにもかかわらず、関西地方に住んでいるものの目にとどまらなかつたというような感じがします。明治以降の伝統的な流れとして、京都の画壇を中心とした関西の画壇と、横山大観や菱田春草らが作り上げていった東京の日本美術院という二つの勢力があり、その間には、非常に競争的なところがありました。それで、関西で日本美術院の画家になるということは、一種の脱藩者のような感じのところがあつて、そのことが、恒富が、関西地方を中心とした西日本で、あまり紹介されなかつた理由の一つかもしれません。

恒富は、大阪でも最初は版下の仕事をするわけですが、そのうちにだいに本画を描く画家になっていきます。ここで一つ重要なことは、恒富が弟子入りした先生の系譜が、恒富の将来の絵の傾向に反映されてくるということとです。恒富が師事した稲野年恒は、浮世絵の画家で、江戸の幕末のグロテスクなものを得意とした芳年という浮世絵師の弟子です。この芳年について、水野年方という人がいます。この人は東京で活躍した明治初めの美人画家ですが、この人の弟子が鍋木清方なんです。ですから、この芳年という人を中心におきますと、水野年方から鍋木清方、稲野年恒から北野恒富へという浮世絵系の流れがあるわけです。恒富は清方と同じように、新聞とか雑誌とかの挿絵から出発していて、その表現には、江戸の浮世絵の一種の庶民性とか軽みとか

が見られるのです。

一方、京都画壇の美人画というのは、写生派といわれた円山応挙から出ているんですね。この応挙の門下には、駒井源琦や祇園井持などの美人画家がいます。この人たちから、明治になると幸野棟嶺という人が出て、その下から竹内栖鳳や上村松園といった美人を描く画家が出てきます。この美人画の系譜の特徴は、いわゆる浮世絵とか版画ではなくて、肉筆画です。だから京都の美人画というのは、肉筆であるということと、写生派の系列を引いているということと、しつとりとしているというか、ねつちりとしているというような特徴があるわけです。しかし、同じ上方の恒富には、この系譜はほとんど入っていないということですね。それは北野恒富の芸術というものを見るときに、わりかた大切な違いではないかと思えます。恒富の最初の頃の悪魔派といわれた絵をよく見ましても、ねちつとした、どろつとしたものではなく、一種の軽さがあるという感じがするのです。

恒富が大阪へ出てきた頃、特に明治から大正にかけての時期というのは、日露戦争から第一次大戦までの間の非常に景気のいい時代です。貿易が非常に盛んで、大阪が一番よかった時代ではないかと思われまふ。またその頃、大阪は、文楽とか歌舞伎とかが非常に華やかな時代でした。だから、文芸的にも商売の上でも華やかなところへ、恒富は金沢から出て行ったということと、若き恒富にとっては、非常に大きな刺激があつただろうと思われまふ。そのうえ、大阪には意外とハイカラな人たちが多く、欧米、特にヨーロッパの新しい芸術が入っていたようです。後期印象派、世紀末美術、象徴派などの絵画が紹介され、そういうものをおそらく恒富は、見ていたんではなかつたかということがいわれます。そうすると、京都の美人画の系譜の影響よりも、むしろ恒富はもっと新しいところから、ヨーロッパの世紀末的な香りというようなものを嗅ぎとっていたんでしよう。それをまた、大阪の世話物といわれるような文楽などとミックスして、悪魔派といわれる絵ができたんだらうと思えます。恒富が一番活躍した大正時代というのは、日本の近代史の中では、最も自由に芸術家たちが活動できた時代だと思えます。ですけども、やはり関西と東京ではずいぶんとそのいき方が違つたわけです。関西ではやはり京

都画壇が、この時代は中心になっていきます。土田麦儼、小野竹喬、榊原紫峰、入江波光、村上華岳たちは、個性というものを大事にして、単なる絵画でなくて、自分たちの生きていくその時代の精神を絵の中へ盛り込んでいきたいということを願いました。それが京都の画壇ではどういふふうに見られたかといつたら、西洋絵画の写実というものに、すくく近づいたわけです。応挙の写生ではなくて、西洋絵画の現実感を求める。それからもう一つは、労働者とか農民とか、社会の底辺で悲惨な生活を強いられた人たちが目立ち始めた時代で、そういう人々をテーマにしていきます。だから美人画も単に美しい女性を描くのではなく、その女性の人生というものに関心を持つようになります。京都の大正時代の絵というのは、とても日本画とは思えない絵を、特に若い画家を中心として、多くの画家が描いたわけです。一方、東京では、小林古径や今村紫紅、速水御舟らの第二世代の画家たちの活躍する時代に入っています。ところが、この人たちは、いわゆる大和絵という日本の伝統的な絵の系列を引いた画家たちですね。東京の絵は、非常に伝統的なものを大切に、線とか空間とか、日本、東洋の絵画に独特のものを追求しようとしていきました。ですから、非常に画面のきれいな線的美しい絵というものを、求めていくということになります。

やがて、関東大震災を境目に不景気になっていき、第二次大戦が用意されいくという、苦しい時代に入っていきます。そういう中でやがて、大正時代的な自由な雰囲気というのがしだいに薄れて、絵の方もデカダンスというのが嫌われていくんですね。むしろ、日本の伝統的なもの、美しいものを求める、という流れが出てきます。だから京都画壇的なものは、だんだんと否定されてくるわけです。その中で恒富も、見ればわかるように、やはりいつの間にか、彼の特徴であつた薄気味悪さというのがなくなつて、非常にきれいなさらりとした情感がある美人画に変わっていくということが起こるわけです。それでも彼はまだ、一生懸命大阪的なものを求めていたのです。

(「北野恒富展 金沢が生んだ美人画の巨匠」にちなんで、四月二十七日にホールで行われた講演内容を、当館の責任で要約したものです。)

## 図書閲覧室NOW

### 新着図書紹介

当館に寄贈される図書の中には、特別観覧によるものがあります。特別観覧とは、当館の所蔵品に関して、規則に則って写真や貸与したり撮影することによって、さまざまな印刷物や番組に、その作品を紹介することをいいます。今回は、そうした特別観覧による寄贈図書の中から、三冊紹介してみたいと思います。

まず「週刊日本遺産 NO.19 金沢/2003/朝日新聞社」です。このシリーズは、次の世代に伝えたい貴重な国内の文化財と自然を紹介するもので、本号では金沢が取り上げられています。その中で加賀藩の美術工芸の箇所では、当館所蔵の加賀時絵や古九谷、加賀象嵌などが紹介され、前田家と茶の湯の項では、仁清の雉香炉や茶釜などが掲載されています。また、それぞれ当館の嶋崎館長が解説していますので、関心のある方はぜひ一度ご覧下さい。次に「週刊やきものを楽しむ 2 九谷焼/2003/小学館」をみてみます。このシリーズは、テレビ番組「なんでも鑑定団」でおなじみの中島誠之助氏の監修によって、日本各地のやきものを探訪するというものです。本号では、当館所蔵の古九谷や再興九谷の名品が紹介されるとともに、中島氏のエッセイや現代作家の一口コメントなどが掲載され、九谷焼に身近に接するためのコンパクトな入門書とでもいえるような内容になっています。一方、「高麗茶碗 論考と資料/2003/河原書店」は、より専門的な内容のもので、高麗茶碗とは、朝鮮半島で生産された陶磁器で、日本で茶の湯の茶碗として用いられる碗を指します。本書は、高麗茶碗研究会が、韓国における古窯址の調査や、伝世する資料の調査、文献資料の収集などを行った成果をふまえて、日韓双方の研究者による論考や詳細な資料によって構成したものです。当館の所蔵品としては、御本半使と呼ばれる、桃山から江戸時代初期にかけて朝鮮で焼かれた茶碗が掲載されています。

開室時間は午前九時三十分～午後四時三十分。貸出し、コピーサービスは行っておりません。

## 月例映画会 今月のイチ押し

七月の月例映画会は、次の二本を上映いたします。

七月十三日(日)	美の美 仏像の出現と展開 パールフットからグプタ仏まで	23分
七月二十日(日)	彫る 棟方志功の世界	39分

前者は、写真家と名高い並河萬里氏の構成・演出によるものです。氏はとりわけインドから中東にかけての仏教遺跡の数々を記録しており、なかでもアフガニスタンの内乱で不幸にも顔面を破壊されたバーミヤン石窟の撮影は有名です。この映画は仏教美術に造詣の深い氏ならではのもので、また釈迦の姿を樹木や足跡に仮託していた紀元前2世紀頃から、ようやく今日の仏像としての様式が確立する紀元後4世紀頃までのグプタ仏までの変遷を丁寧に記録されています。とりわけ庄巻なのは、最初に登場するアショカ王時代のインド中部のパールフットに残された壮大な浮彫による釈迦の生誕物語で、後に中国、そして日本にまで到達する仏教美術の原点をそこに見ることが出来ます。

後者は、世界的に知られた版画家棟方志功を真っ正面からとりあげた記録映画で、志功の天衣無縫な創作風景と、彼の素顔を見事にとらえています。何よりも映画製作者自身の強い思い入れが、対象者である志功その人の強烈な個性とを真っ正面からとらえており、こうした記録映画には珍しい熱気のはらんだものとなっています。その評価は、昭和五十年度の芸術祭大賞、キネマ旬報文化映画部門の第一位(十五人の選定者全員が一位投票という快挙)をはじめ、数々の受賞と推薦を得たことでもわかります。厳しい風雪のシーンからねがた祭りまで、故郷津軽の原風景とそこに生まれた志功の生き様、そして何よりもわずかに視力が残された片目をすりつけるようにして版木に向かう創作風景は、今日でも見る者の心を強くつかんでやみません。ちなみに、本年度全国を巡回開催される「生誕百年記念 棟方志功」展が、七月二十七日まで、高岡市美術館と福光町立福光美術館で開催されています。

## 企画展示室

### 第7回石川県日本画協会展

七月十七日(木)～七月二十一日(月・祝)

(第8・9展示室)

県内在住の日本画の作家を中心とした会員の、県内未発表作品による展覧会です。各種公募展の枠組みや既存の概念にとらわれることのない自由な作品発表を目指し、会員それぞれが取り組んでいる日本画制作の研究・模索の発表の場、また研鑽の場ともなっています。ペタランから若手まで幅広い層にわたり、広く県内日本画家の作品および近年の活動を知る上で、絶好の機会となっています。

入場無料  
連絡先 金沢市光が丘三丁目二六番地一

☎〇七六 二九八 〇一〇四 竹内仁志

### 第17回日本新工芸石川会展

七月十八日(金)～七月二十一日(月・祝)

(第7展示室)

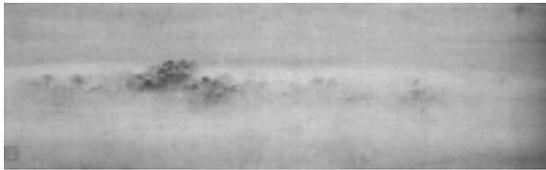
日本新工芸家連盟は、工芸の原点を見つめ、個々の作家が素材を生かし技術を駆使して、現代に望まれている生活と美との調和をテーマとして制作活動を続けています。石川会展も十七回を迎えることが出来ました。会員一同、一層の努力を重ねております。より多くの方々にご覧、ご批判を戴きたいと念願しております。

主な出品作家

北出不二雄・高光一生・利岡光仙・榎木莊平  
中町朱実・原田実・戸出克彦・畑宏・高聡文  
柴田博・大井幸子・向瀬孝之・川田稔・松本昭二  
高光一雅・比古田三恵・金田一司・瀧川千春  
瀧川佐智子・堂畑勝一・伊豆蔵幸治

入場料 一般六〇〇円 大学生以下三〇〇円  
当館友の会会員は、会員証提示により三〇〇円  
連絡先 金沢市宮野町下七四

☎〇七六 二五七 戸出克彦  
五九五一



国宝 煙寺晚鐘図 畠山記念館蔵

企画展 TOPIC

「畠山記念館名品展」その一  
墨 牧谿筆 煙寺晚鐘図をめぐって

十二〜十三世紀頃の中国宋代に描かれた絵画は、鎌倉後期から室町時代に日本へ渡ります。それらは、日中禅林の交流によってもたらされたものがほとんどで、禅寺に伝わる当時の記録によれば、絵画だけでなく、墨蹟や陶磁器など、かなりの文物が海を渡ったことがうかがえます。中でも水墨画を主とした宋代の絵画は、その余情に満ちた世界が神の教えに通じるとされ、当時の禅林で好まれました。

さて、これら宋代の絵画は、中国では現在、あまり見ることができず、日本に多くを伝えるのが現状です。中国より日本に残る、宋代の絵画……。どうして日本では伝えられ続けたのでしょうか。ここでは、今秋開催の「畠山記念館名品展」に出品される宋代絵画の中から、絵画をめぐる流転の一話をひも解いてみましょう。

禅林に入った中国からの文物の中には、將軍足利家に献上されたものもありました。室町幕府には、美術工芸の専門知識を有する同朋衆という職があり、これらの文物の管理を行っていたのです。俗に、三代將軍義満が愛好したものは「北山御物」、八代將軍義政のそれは「東山御物」と呼ばれます。

その「北山御物」「東山御物」の一つであったのが、牧谿の『瀟湘八景図』でした。「瀟湘八景」とは、中国・洞庭湖周辺をめぐる八つの水景をいいますが、日本でも描かれるようになる画題の一つです。八図は当初、四図を一巻として、合計二巻に描かれていましたが、義満は一図ずつ分断、座敷飾り用にそれぞれ軸装仕立てに改変させてしまいました。同朋衆の記録によると、当時、宋代の絵画、ことに牧谿画は座敷を飾る名画として珍重され、牧谿は「上々」の画家として、最高の評価を得ていたのです。

しかし、幕府の権力の衰退に伴い『瀟湘八景図』はその手を離れ、八図は分散してしまいます。そ

の中の二つ『煙寺晚鐘図』は、三代將軍足利義満を暗殺した松永久秀の手に渡り、続いて彼を降伏させた織田信長、やがて徳川家康の元へと、権力の推移に伴い流転を繰り返します。言わば、歴史上のいくつもの転機を見つめた絵画でもあるのです。分散した牧谿の『瀟湘八景図』は、享保十三年（一七二八）江戸幕府八代將軍徳川吉宗により、一堂に会する機会を得ます。流転を余儀なくされた八図が、約百五十年ぶりに再会する奇跡に、人々を魅了し続ける名画の力を感じずにはいられません。異国の絵画が日本で生き続けた生命力の証とも言えます。

『煙寺晚鐘図』は、その後、加賀藩前田家に入り、昭和時代に畠山家へ渡ります。さて、畠山家は、元々室町幕府の管領を務めた家柄です。当時、畠山家は徳寺に帰依し、龍源院・興臨院といった塔頭を建立しています。現在、大徳寺にいくつもの牧谿画が伝わっていることを考えると、畠山家と『煙寺晚鐘図』を結び、いにしえからの因縁をも見えるような思いがします。

（村上尚子 学芸員）

「開館20周年記念 畠山記念館名品展 茶道美術を中心に」  
十月四日（土）〜十一月三日（月・祝）

七月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月 日	行 事	内 容	会 場
7/5(土)	土曜講座	詩歌の意匠	講義室
7/6(日)	CDコンサート	20世紀の名指揮者 ヘルベルト・フォン・カラヤン ベートーヴェン 交響曲第5番「運命」ほか(約70分) 演奏 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団	ホール
7/12(土)	土曜講座	仏像45 河内のほとけ	講義室
7/13(日)	月例映画会	仏像の出現と展開 パールフェートからグプタ仏まで(23分)	ホール
7/19(土)	土曜講座	近代の数寄者 畠山即翁	講義室
7/20(日)	月例映画会	彫る 棟方志功の世界(39分)	ホール
7/26(土)	土曜講座	名画への挑戦3 デューラー「メランコリア」	講義室
7/27(日)	連続講座	開館20周年記念連続講座 美術館よもやま話 加賀の茶道	講義室
7/28(月)	親子で鑑賞会	彫刻を探ろう! 小学校1・2年生	講義室
7/30(水)	親子で鑑賞会	古美術を探ろう! 小学校3・4年生	講義室

七月の全館休館日は十四日(月)〜十六日(水)です。

各地の展覧会

七月

- 開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。
- 榑方志功 福光展 7/27まで
  - 福光町立福光美術館(富山県福光町) 〇七六三 五一 七五七六
  - 相田みつを展 心に響く言葉の力 7/5〜27
  - 福井市美術館(福井市) 〇七七六 三三 二九九〇
  - 三尾公三展 7/21まで
  - 富山県立近代美術館(富山市) 〇七六 四二 七二二
  - インド・マトウラー彫刻展 7/1〜8/17
  - パキスタン・ガンダーラ彫刻展 7/1〜17
  - 奈良国立博物館(奈良市) 〇七四一 二二 七七七二
  - ワイルドスミス絵本の世界 おとぎの国のファンタジア 7/5〜27
  - 岐阜県美術館(岐阜市) 〇五八 一七一 一三三三

次回の展覧会

- 特集 加賀藩の美術工芸(前田育徳会展示室)
- 特集 俳画の世界 (第2展示室)
- 特別陳列 日本画家 中町進の世界 (第4展示室)
- 八月二十一日(木)〜九月二十九日(月)



きせとねぶとこうごう  
黄瀬戸根太香合

桃山時代 16～17世紀

胴径4.7 底径2.3 高3.1(cm)

黄瀬戸は、美濃地方の方々の窯で焼成され、桃山時代の作品は釉調が特に美しく、独特の趣を有し優れたものが多くあります。「菅蒲手（あやめで）最盛期の黄瀬戸で、名称の由来は、井上侯爵家に所蔵されていた『黄瀬戸菅蒲文輪花鉢』をその代表作としてつけた仮称が定着したもの。線彫りの花文を中心に緑釉（いわゆる胆礬）と鉄釉が施されたものが典型。釉調は薄く、失透気味で油揚肌であるので油揚手とも呼ばれる。器種は食器がほとんどで、香合などもある。」と、「ぐい呑み手（菅蒲手に先行するもので、厚手で釉調は光沢があり、色彩は伴わない。名称の由来は六角形のぐい呑みをもその代表としたことによる。）」とがあります。

根太とは腫れ物のことで、姿が似ている下膨れの香合を根太香合と呼びます。黄瀬戸には宝珠を形どった宝珠香合がありますが、蓋の甲にふくらみのないものを根太香合と呼びます。根太香合は平宝珠とも呼ばれ、平たい丸い身に円錐形の蓋が付き、宝珠香合の蓋が全体的に丸みを持つのに対し、蓋の頂点からの傾斜が直線的なものをいいます。

この香合は、印籠蓋形式の香合で、底は暮笥底（こけぞこ）になっており、底の中央は浅く削り込まれています。蓋には二本の刻線がめぐらされ、頂と一カ所に鉄釉を点し、他の三方に胆礬を大中小と点じています。大の胆礬は濃くどつぷりとかかり、一部かせており、裏面に小さく薄く青味が出ており、いわゆる抜け胆礬となっています。小の胆礬は薄くぼかしたように施されています。身の合口は一部土肌を見せ、身と蓋を合わせて焼いた目跡が三つ残り、底には置跡が残っています。

黄色いしっとりとした独特の質感の油揚肌にさりげなく鉄釉と胆礬を点じたこの香合は、ほのぼのとした味わい深さが感じられ、また、愛くるしさも感じさせ、手に取ってみたいものです。

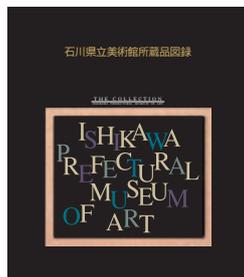
茶道美術名品展 七月十七日～八月十七日（に展示

ミュージアムショップ通信

先月は、暑かったり寒かったりと気温の変化の激しい日が多くて、体調を崩された方もいらっしやっただのではないでしょうか？かくいう私も風邪をひいてしまいました。なによりも健康が一番、気合いを入れ直し頑張っていきましょう！

今月は当館自慢の一冊、「石川県立美術館所蔵品図録」を紹介いたします。開館以来、当館の所蔵品もずいぶん増えました。それに合わせて図録も一新したのです。うれしいことに、価格も据え置きで三、五〇〇円。一度手にとってご覧になってみてください。二七二三点が収録されています。是非、購入を検討してみてくださいませ。お待ちしております。

話は変わりますが、七月七日は七夕です。牽牛星と織女星が年に一度天の川を渡り相会する日、供え物をして短冊に願いを込め、星を祭る行事です。中国から伝わり、日本では宮中の行事として奈良時代から始まったそうです。今年は何をお願いしましょうか。私はやはり、健康かな…？



「石川県立美術館所蔵品図録」  
(定価3,500円)

休館日

七月十四日（月）十六日（水）

石川県立美術館だより

第一二二七号 平成十五年七月一日発行

〒九二〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六（一三二）七五八〇

FAX 〇七六（一三四）九五五〇